

「——……うあ、…っ、」

「あ、お姉さん目覚ました？♡」

ゆっくりと意識が覚醒する。

私はうつ伏せに寝ているようだ。

体の前面には柔らかいマットレスの感触、視界には木目調の床。そこへ、ベッドの脚だろうか、細い棒が伸びている。

甘く濃い、いい匂いがする。

体が熱い。あとくすぐったいような、むず痒いような…。

ビクンッ♡

反射的に体が跳ねた。

それを背中から何かが押さえつける。

「さすがに反応でかくなっただな」

「お姉さん、寝ながらめーっちゃ声出てたよ♡ 無意識の喘ぎ声エロかった〜♡」

「んあ、あ…っ、……？」

ベッドにうつ伏せになっているはずなのに、なぜか胸に重力を感じる。

私の胸は、ベッドに空いた穴から下へ露出されていた。下半身も同じだ。股間の辺りだけマットレスの感触がない。

そこで気付いた。

私は裸だった。

「……？ これ、なに、ここどこ…？」

顔だけを上げると、そこは知らない部屋。

白いマットレスだけが乗ったベッド。

すぐ近くには、勢いよくスチームを噴き出すディフューザーが置いてある。

そして目の前には、明るいブラウンの髪の男性がいた。

その後ろから、さらに二人の男性が私の視界に現れた。

ベッドの端にしゃがみ、私と視線を合わせているのは、ブラウンのふわふわした髪 of 男だ。

可愛らしい顔立ちで、にこにこ人懐こく笑っている。

右側から顔を覗かせたのは、大きな男だった。

広い肩に分厚い胸板。シャツから覗く浅黒い肌にはタトゥーが見える。

センターで分けた黒髪の間隙から覗く目は鋭く、かなり威圧感がある。

そして左側から顔を覗かせたのは、ワイシャツの男だ。

清潔感のある爽やかな顔立ちで、ジャケットを着ていればそのまま印象のいい会社員に見えそうだ。

隙のない雰囲気をしている。

「……、わたし、なにを……」

「忘れちゃった？ オレの名前覚えてる？ 光太郎（こうたろう）だよ？」

目の前でふわふわの髪がこてんと傾いた。

その後ろでワイシャツの男が腰を屈め、手を振りながら覗き込んでくる。

「おはよ。俺は祐介（ゆうすけ）ですよー。で、このマ

ツチヨは真也（しんや）ね」

「え、マジで忘れた？ほんとに起きてんの？効きすぎだろ」

三人の顔を順番に見ながら、私は必死に記憶をたどる。

……そうだ。三人とも、見覚えがある。

仕事帰り、一人で飲んでいた私に話しかけてきたんだ。

そのまま一緒に飲んで、かなりテンションが上がって  
…それで……。

「おね一さんがオレたちと4Pしてくれるって言うから、  
秘密の部屋に連れてきたんだよ♡♡」

光太郎くんが、ベッドの穴から下へ垂れた胸の先を指  
で撫でた。

「……ッ♡♡」

瞬間、体が震えて、ビリビリと強張って。

次に真也くんが立ち上がり、私の背中を指先でつ、と  
撫でた。

「この部屋、防音になってっから♡ いっぱい声出して

いいからな♡♡」

「うッ、……」

それから祐介くんも身を寄せてくる。

「お姉さんが知りたいって言ったんですよ♡ どこまで気持ちよくなれるか、試してみたいって♡」

「ああ…っ♡」

ベッドの穴から見えているだろうクリトリスを、手のひらで撫でた。

……ああ、そうだった。

顔のいい三人に囲まれて調子に乗った私は、酔っ払いながら自分からそんなこと言ったんだ。

でもだからって意識飛ぶ？

ここに連れてこられたのも覚えてないし、こんな体勢を取らされたことだって覚えていない。

しかも、酔っ払っただけでこんなに体が敏感になるだろうか。

少し触られただけで体がビクついて、乳首もクリトリスもじんわり熱を持って…。

視界がスチームで曇る。

濃いけど、いい香り。

なんの匂いなんだろう。

「初対面の男を誘っちゃうなんて、よっぽど飢えてたんだろ♡」

真也くんが大きな手のひらでお尻を撫でた。

「……っ♡♡♡」

ぞわあ♡♡

ただ撫でられたただけなのに、皮膚の下まで触られているような感覚がして体を振る。

「誘われたからには、たくさん気持ちよくしてあげないとね♡」

「っ♡ あ、♡♡」

光太郎くんが今度は乳首をくるりと撫でた。

「お姉さんが寝てる隙に快感育てといたんで♡ このまま気持ちよくなっちゃいましょうか♡♡」

「うあ♡♡」

それから祐介くんがそう言ったあと、クリトリスに柔らかくて温かい、湿った感触。きっと舌だ。

光太郎くんは指を立たせ、指先で、  
すり♡

乳首をピンポイントに擦る。

祐介くんは穴から覗くクリトリスを、  
れ♡ れろ♡

優しく舐めて。

真也くんは腰からお尻にかけてを、  
ちゅ♡ ちゅ♡

音を立てて啄んだ。

「……っあ♡ あ、あ、っ♡ ……っ♡ …♡」

やっぱり体がおかしい。

乳首もクリトリスも、体中の皮膚まで感覚が研ぎ澄ま  
されているようで…。

すり、すり♡ すり♡

れろお…♡ れ♡ れ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ、♡

「……っ、…♡♡♡」

気持ちいい……♡♡♡

「おねーさんの顔、とろんってしてきたね♡ 起きてる  
ときのほうが気持ちいいでしょ♡」

すり♡ すり…♡ すり♡

乳首の勃起を思い知らされるように撫でられる♡♡

れ♡ れ♡ れる♡ れるお♡

下半身ではベッドの下に潜り込んでいる祐介くんがクリトリスをあやすように舐め♡

ちゅ♡ ちゅう♡ ちゅっ♡

お尻の薄い皮膚を真也くんに吸われる♡

「…は♡あっ♡ なにこれ♡♡ っあ♡ ツ♡ 気持ちい…♡♡」

「こら、腰浮かすな♡」

思わずベッドから離れてしまった腰を、真也くんに上から押さえつけられてしまった♡

背中にのしかかり、今度はうなじや肩にキスしてくる♡♡

それすら気持ちよくなってしまう♡♡

「クリ、もっと気持ちよくなりましょうか♡♡」

祐介くんが指で私のクリ皮を広げた♡

剥かれたクリトリスが空気に晒され、息を漏らす、と♡♡

れろっ♡♡

「…ッ！♡♡♡」

無防備はその粒を、舌で弾かれた♡♡♡

れろれろっ♡♡ れろれろれろっ♡♡

「んひ、ッ♡♡」

レロレロレロレロ…っ♡♡

「っっ、〜〜〜！♡♡♡」

一気に膨れ上がる快感♡♡

真也くんの下でジタバタと暴れる体は自分で制御できない♡♡

「乳首ももうちょっと強くしよ♡」

光太郎くんがそう言うと、乳首は硬いもので擦られた♡♡

さりさりさりっ♡♡

さりさりさりさりっ♡♡

「あ…ッ！♡♡ んあぁっ♡♡」

爪だ♡♡

爪で乳首の先端を擦られている♡♡

れろれろっ♡♡ レロっ♡♡ レロっ♡♡ レロレロ  
レロッ♡♡

さりさりさりさり…♡♡ さりさりっ♡♡ さりさり  
っ♡♡

「……ッお♡♡♡ お、ほお…！♡♡」

「はは、すっげえ声♡ いいぞ、遠慮なく汚い声出せ♡  
♡」

レロレロレロレロ…ッ♡♡ れろっれろっれろっ♡♡  
ときどき唾液を絡ませ、クリトリスをあやす舌♡  
さり、さり、さり♡♡ さり♡さり♡さり♡さり♡  
乳首の先端を摩擦し、鋭い感覚を与えてくる指♡

胸を反らしたり浮かせたりしながら、私は近づく絶頂  
にぽかんと顎を下げた♡

「…ッ♡♡ あ♡ お♡ おっ♡♡ んお♡ ま、って  
♡ これ、……！♡♡」

「乳首もクリも気持ちいいんだろ♡ イけイけ♡♡ 俺  
たちにお姉さんの初アクメ見せる♡♡」

のしかかる真也くんの重さに、この快感から逃げられないと悟る♡

私は震える手を握り締め、カタカタとマットレスを鳴らした♡

れるれる、れるれるっ♡♡ レロッ♡ レロッ♡  
さりさりさり…っ♡♡ さりさりさりさりっ♡♡

「……っっ♡♡ あッ、ア、イクっ♡ イク…！♡♡♡  
〜〜〜〜っ！！♡♡♡」

「お姉さんの初アクメ♡♡ 体ガチ痙攣させててかわい♡♡」

体がマットレスに更に沈み、大きく息を吐いた♡♡

いった……、いったけど、三人は止まらなかった♡♡  
♡

きゅ……っ♡♡

乳首は両方、下向きに引っ張られ♡

ちゅううう……♡♡

クリトリスは唇に包まれ、吸われた♡♡

「お……！！♡♡♡」

「だから腰浮かすなって♡」

真也くんはさらに体重をかけて、私の耳をしゃぶってくる♡♡

きゅっ♡♡ きゅうっ♡ きゅむ♡きゅむ♡

「おッ、っっほ♡♡ お♡♡ お♡♡」

引っ張られながら揉まれる乳首♡

ちゅっ♡♡ ぢゅ、ぢゅッ♡ ぢゅむんっ♡♡

「オ…ッ！♡♡ ツッお♡♡ おッ♡♡」

吸われ、口内に閉じ込められるクリトリス♡♡

「だ、め…！♡♡ イってるのに、い！！♡♡♡ やめ、  
て、ちょっと待って、…！！♡♡♡」

「おねーさんの乳首、気持ちよくして～♡って誘惑してくるんだもん♡」

「クリも♡ パンパンに膨らんでおいしそうですよ♡  
♡」

きゅむッ♡きゅむッ♡ きゅ～～っ♡♡

ちゅむちゅむちゅむっ♡♡ ぢゅむッ♡ぢゅむッ♡

「や…ッあ♡♡ っほ♡おおっ♡♡ なんで…！♡  
またきもちいいの、きてる…っ、」

「おっ♡ こんなにすぐ連続アクメキメちゃう？♡♡」

きゅっ♡きゅっ♡きゅっ♡ きゅむ……っ♡♡  
ちゅ、ちゅ、っ♡♡ ぢゅむむむっ♡♡ ぢゅむむむ  
っ♡♡

「あああ、あ、アッ♡♡ うそ♡♡ もうイクっ、イク  
ちゃうっ♡♡ い、……………〜〜〜っっっ！！！！♡♡♡  
♡」

「はいイッた〜♡♡ ザッコ♡♡♡」

体が痙攣する♡♡

それでもまだやめてくれない♡♡♡

今度は乳首も、光太郎くんの口に含まれてしまった♡  
♡

敏感に育った乳首が粘膜に包まれて、先端から背中ま  
で、電流のような感覚が走る♡♡♡

ちゅ♡♡ちゅぽ♡♡ ちゅぷ、ちゅぷ♡♡ ちゅっ♡  
♡ ちゅーっ♡♡

ぢゅッぽ♡♡ ぢゅぽっ♡♡ ぢゅぷぷぷっ♡♡ ぢ  
ゅぷぷっ♡♡

「お、……ッ！！♡♡♡ らめ、も、……！♡♡♡ お

おっ、おおッ、おっ、お、…ッ！！♡♡♡」

「体ガクガクじゃん♡♡ すっげー汗出てきたし♡ マ  
ジアクメもっかい見せる♡♡♡」

「まってえ、おねがい、きゅうけい、♡♡ っっお♡♡  
お♡♡ お♡♡ すわないれ♡♡ りょうほ、吸うの、  
よわ、…♡♡」

手足がバタバタともがく♡

それでも何度も重ねられる絶頂を逃せない♡♡

重なるたびに波は大きくなって、体全部を飲み込んで  
いく♡♡

ちゅ〜〜〜っ♡♡ ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅッ♡  
♡ ……ちゅうううっ♡♡

ちゅぷぷ♡♡ ちゅぷぷ♡♡ べろん♡♡♡  
ちゅ————…ッ！♡♡♡

「お♡♡ おお♡♡ きもち♡♡ こんにゃ♡♡ むりっ、  
イかないのむり♡♡ ……ッ！♡♡♡ おあああ、  
あ…♡♡ イ、く♡♡ またイくう……！♡♡」

ちゅうう〜〜〜〜っ！！♡♡♡♡♡

乳首もクリトリスも、激しく吸われた♡♡

私は足をピンと伸ばし、ベッドから浮かせて、

「ッッンおおおお……！！！！♡♡♡♡」

いった……♡♡♡♡

「……あはは、お姉さんの発情汁、クリまで垂れてきちやってますよ♡ もったいなあ♡♡」

ベッドの下で祐介くんが楽しそうにそう言い、余韻にヒクつくクリトリスを舐めた♡

その優しい刺激すら、私の中の快感を呼び起こすのに充分で♡♡

弾かれたように体をビクつかせてしまう♡♡

「さ、もうそろそろまんこの準備もしよっか？♡」

やっと背中から離れた真也くん♡

片手でまた私の腰を押さえつけて、もう片手は割れ目に沿うように、指を滑らせてきた♡

「あーあ、すぐ指べちゃべちゃになった♡ どんだけ濡らしてんだよ♡♡ そんなにまんこにも欲しかった？♡」

「……、あ、あ♡」

見えなくても分かる、体格に似合うごつい指♡♡  
真也くんは二本の指で襞を掻き分け、濡らした指をゆっくり挿入してきた♡♡

「あ、は……あッ♡♡♡」

中で指の形をはっきりと認識する♡  
それだけ感覚が研ぎ澄まされてしまっている♡♡

「まんこあったか…♡♡ 指しっかり締めてくれてるし♡ ここにちんぽぶち込むの楽しみだわ♡♡」

「っ♡ ん♡♡ あ♡あ♡」

まだおまんこに指が埋まっただけ♡なのに、体の芯が震えるのが止まらない♡♡

真也くんの言うように、おまんこが待ち侘びていたみたい♡

「動かすぞ～♡♡ ほら♡ ほら♡」

ぬち♡ ぬち♡

「あ♡ ん♡♡」

小さく動かされる♡

ぬち♡ ぬち♡

「ッ♡♡ ああ、♡」

それでも微かに引きずられる膣壁が♡

ぬち♡ ぬち♡

「は、う♡ っ♡」

じんわり気持ちよくて♡

ぬちっ♡ ぬちちっ♡

「気持ちよさそうだな♡」

ぐるり、真也くんの指が向きを変えた♡♡

お腹側に指の腹を当てられ♡

くちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅっ♡♡

「おッ♡♡ あ♡ そこらめ♡♡」

軽く圧迫されながら指を動かされる♡♡

くちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅっ

♡♡

「おッ、おお、ッ♡♡ おおっ♡♡」

「これいいか♡ まーた腰逃げようとしてるぞ♡♡だめ  
だって言ってるのに♡♡」

お尻を押し戻される♡

真也くんの指ピストンは速くなった♡♡

くちゅちゅちゅちゅちゅ…っ♡♡

「う、…ッお♡♡ おおおっ♡おおんっ♡♡」

「締まる締まる…♡ このまままんこも気持ちよくなる

うな〜♡♡」

くちゅちゅちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅちゅちゅっ♡  
♡

ビクつく腰とお尻を大きな手で押さえ込まれ♡  
ベッドの下に晒したクリトリスは、また祐介くんに触  
られた♡♡

「クリも手伝ってあげますね♡ 皮ごとシコシコってし  
ましょうか♡♡」

横から指で挟まれて♡  
ちゅこちゅこちゅこっ♡♡  
小刻みに付け根から先端まで擦られる♡♡  
ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこち  
ゅこっ♡♡  
まるでおちんぽをしごくみたいに、規則的に♡♡

「…ッっ！！♡♡ おッッ、ほ…！♡♡♡」  
「お姉さんのマン汁で滑りやす♡ シコシコしやすくて  
助かります♡♡ 効くんでしょ、これ♡ どんどん垂れ  
てきますよ♡♡」

くちゅちゅちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅちゅちゅっ♡



ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡  
「お♡お♡♡お♡♡おっ♡♡ きもちっ♡♡〜〜〜っ♡」



ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡  
「あ、ああああっ♡♡ らめなるっ♡♡ おまんことクリ♡きもち、く、なっちゃってる…う！♡♡♡ ツほ、おお♡♡♡」

あまりの気持ちよさに胸を反らし、視線を上げる♡  
相変わらず濃く香るスチームの向こうから、光太郎くんがにこにこ可愛らしい顔を近づけてきた♡

「とろけた顔してるね〜♡ 知らない男に知らない場所に連れてこられて、そんなト口顔してさ♡♡ おねーさんえっちなことに弱すぎでしょ♡♡」

頭の後ろに、光太郎くんの手が添えられる♡♡  
固定されると、光太郎くんの唇が私の口を塞いだ♡♡



「……っ、♡♡」

「またまんこ締まった♡ キスも好きなんだな♡♡ 全身弱いのかよ♡♡♡」

後ろから真也くんの声がする♡

それは光太郎くんのキスの音に掻き消される♡♡

ぢゅっ♡♡

唇を吸われ♡

ぢゅぷ♡ ぢゅ〜〜……♡♡♡

粘膜同士が密着すると♡

れ♡♡

舌が入ってきて、

ぬろ、ぬろお……♡♡♡

私の舌を捕らえた♡♡

引きずり出された舌は、

ぬ、ぽ♡♡

光太郎くんの唇で食まれ♡

ぬぽ♡♡ ぬぽっ♡ぬぽ♡♡

しごかれる♡♡

細めた光太郎くんの目と目が合って♡♡

その視線だけで体がざわつく♡♡♡

くちゅちゅちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅちゅちゅっ♡  
♡

ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡

ぬぽ♡ぬぽ♡ ぬぽッぬぽっ♡ ぬぽ♡

「お、あ……ッ♡♡ お、お、…！♡♡♡」

おまんこと、クリトリスと、舌と♡♡

くちゅちゅちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅちゅちゅっ♡  
♡

ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡

ぬぽっぬぽっぬぽっ♡♡ ちゅ♡ぢゅっ♡ぢゅ♡

「……っ♡ ♪♡♡ ……おん♡♡」

ぜんぶ、痺れるみたいに、きもちよくて♡♡

「痙攣してお尻ふるっふるだ、かわいい♡♡ イきそう  
なんだろ♡♡ おまんこ、指イキしろ♡♡♡メスアクメ  
しろ♡♡♡」

足がピンと伸びて、指が丸まる♡♡

体の中でいっぱいになる絶頂感に息を止めてしまう♡  
♡♡

くちゅちゅちゅちゅっ♡♡ くちゅちゅちゅちゅっ♡  
♡

ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡ ちゅこちゅこっ♡♡

ぬぽぬぽぬぽぬぽッ♡♡♡

「……、お♡♡♡ おお、おっ、お♡♡♡♡」

目が開けていられなくて、瞼まで引き攣り、ぐるりと視線が上向くと♡♡♡

「イ、くう、ううう……………！！♡♡♡♡♡」

おまんこで真也くんの指を強く締めながら、いった♡♡♡

全身がカタカタと震え、汗が噴き出る♡

引き攣った体は、ゆっくりと力が抜けて♡  
バテるようにベッドに突っ伏した♡

だらり、ベッドの端から腕も垂れた♡

……おかしい。  
もう何度もいった。

それでもまだ体の疼きがおさまらない。  
体はくたくたで自分で動かせそうにないのに。  
乳首もクリトリスもおまんこも、欲しがるようにヒク  
ついている。

私の体、どうかしてしまっただけだ。

「イキ疲れてくたばってんの、悪いけどちんぽにクるだ  
けなんだよなあ♡」

衣擦れの音がする♡

その音だけで、自分が期待していることに気付く♡♡

埋めてもらえる♡

この疼きをなんとかしてもらえる♡♡

はやく、はやく……♡♡♡♡

ベッドが軋んだ♡

逞しい手が両手で私のお尻を掴み、くい、とおまんこ

を上向かせ♡

「……、♡♡♡」

熱いものがおまんこに触れた♡♡

それはゆっくりと、おまんこを割って進んでくる♡♡

♡

「っ♡♡ ……は、ッ♡♡♡」

「あ——……♡♡♡ いいわ、狭い優秀まんこ♡♡あれ  
だけイってめちゃんと締めてくれるわ♡♡♡」

足がおちんぽに促されるように開いていく♡

その足の間に真也くんは体を差し込み♡♡

斜め上から埋めるようにおちんぽを進めた♡♡♡

「お♡♡ あ…、っ♡♡♡ ふあ♡♡あ♡♡♡」

「たまんねえわ、お姉さんのおまんこ♡♡ ほら、もう  
すぐ全部入るからな♡♡」

クリトリスや乳首への刺激とは違う、淡くて熱くて、  
焼けるような熱が、深いところからじわあ♡と体全体へ  
染み渡っていく♡♡♡

……ぶちゅう♡♡

体がおちんぽに押し上げられ、真也くんは私の体を留めるように腰を掴んだ♡♡

おちんぽが奥に蓋をしている♡

太いおちんぽで閉じ切れない膣壁が、ヒクついている♡♡♡

「おお……、お、おおお……♡♡♡♡」

まるで味わうような声が漏れた♡♡

「おねーさんちんぽ挿れられただけで白目剥いちゃってんじゃん、やば♡♡」

「効きすぎじゃない？ 元からエロいから効きすぎちゃってんのかな」

「じゃあ遠慮要らないな♡ 一緒に天国見ような、お姉さん♡♡♡」

ずる……っ、

——ばすっっ！♡♡♡♡♡♡

膣壁を巻き込みおちんぼが引いて、すぐに突かれ♡♡

「〜〜〜〜っ！♡♡♡♡」

悶える♡♡♡

ピストンが始まった♡♡

ずるる…っ♡♡

ばすっ！♡♡

「ッッお！♡♡♡」

ずるる…っ♡♡

ばすっ！♡♡

「ほ…ッ♡♡♡」

ずるる…っ♡♡ ばすっ！♡♡

ずるる…っ♡♡ ばすっ！♡♡

「ふォ♡♡ おおお…ッ！♡♡♡」

「っあー……まんこきもちい♡♡♡」

真也くんの腰がぶつかるたびに体がマットレスに沈む

♡♡

「おっばい揺れてる♡♡ 指置いといたら勝手に擦れそ

♡♡♡」

乳首を狙って置かれた光太郎くんの指を♡

揺れるたびに乳首が掠める♡♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡

「おおおッ♡♡ んお、ツッお♡♡♡」

そのたびに先端からチリッと電流が走り♡♡

ずるるっ、ばすっ！♡♡♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡

♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡ こすっ♡♡

おまんこが縮こまれば、余計におちんぼが気持ちいい

♡♡♡

ずるるっ、ばすっ！♡♡♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡

♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡ こすっ♡♡

「おっおおお！♡♡ や、ば…！♡♡♡ おっ♡♡ …

…ッっ！♡♡♡」

「まんこの具合最高だわ♡♡♡ ずっと腰振れる♡♡」

「乳首また固くなったぁ♡♡ ビンッビンに勃起してる

♡♡♡ 舌も舐めててあげるね、舌出して♡♡」

光太郎くんが舌をチラつかせ、誘われるがままに舌を出した♡♡♡

舌が絡まると、すぐに唇が吸い付いてきて♡

ぢゅっっ、ぽお♡♡♡♡♡

光太郎くんの口内に閉じ込められる♡♡♡

ずるるっ、ばすっ！♡♡♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡

♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡ こすっ♡♡

ぢゅ、ぽお♡♡ ぢゅっっぽ♡♡♡ぢゅっっぽ♡♡♡  
「……ンお♡♡ おっ、お、ん♡♡ んう♡♡ …、ッ  
！♡♡♡」

「下からお姉さんのおまんこがちんぽ啜えてるの、よく  
見えますよ♡♡ クリちんぽもフル勃起キープして触っ  
てほしように揺れてる♡♡♡」

ちゅ♡♡

啄むみたいに、祐介くんの唇がクリトリスに触って♡  
♡♡

ぢゅる、ぢゅるう……！♡♡♡♡♡

包皮ごと音を立てて吸われる♡♡♡

「お♡♡お♡♡♡お♡♡お♡♡♡」

ぢゅる、ッッぽ！♡♡♡ ぢゅるッぢゅるッぢゅるッ  
ぢゅるッ！♡♡♡

口の中で荒々しく転がされた♡♡

ずるるっ、ばすっ！♡♡♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡  
♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡ こすっ♡♡ こすッ♡♡

ぢゅッ、ぢゅるッ♡♡ ぢゅるるるるッッ！♡♡♡

ずるるっ、ばすっ！♡♡♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡

♡ ずるるっ、ばすっ！♡♡♡

こすっ♡♡ こすッ♡♡ こすっ♡♡ こすッ♡♡

ぢゅッ、ぢゅるッ♡♡ ぢゅるるるるッッ！♡♡♡

「乳首もクリも気持ちよくしてもらってハメ穴さらにキツくなったぞ♡♡♡ 狭まんこ、デケえ亀頭にこじ開けられて気持ちいいな～？♡♡」

「お…ッ♡♡おっ♡♡きもちっ♡♡♡ おおッおっ♡♡♡ おッう♡♡♡」

乳首もクリトリスもおまんこも♡♡ 全部気持ちよくされて♡♡♡♡

手がベッドの端を握り込んだ♡♡

バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡

「おッ♡♡ あ、ッあ♡♡♡ やばいっ♡♡ おちんぽ、つよ♡♡♡ お…！♡♡ おおおっ、おおッ♡♡♡♡♡」

強くなるおちんぽ♡♡

私を追い詰めようとしているのが伝わる♡♡♡

バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡  
バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡ バスッ！！♡♡♡  
……バスバスバスバスッ！！♡♡♡♡♡

バスバスバスバスバスバスバスッ！！！！♡♡♡♡♡

「……ッ！！♡♡♡♡♡ んッ、んぐ、う……ッ！♡  
♡ ふううう！！♡♡♡♡♡」

「さいっこうだわ、お姉さんのまんこ♡♡ 尻までしっかり  
食い込ませるのたまんね♡♡♡ 射精するぞ♡♡♡  
♡」

腰を強く掴まれて♡♡

私はキスの隙間になんとか息をする♡♡♡

それも、荒々しくぶつかる真也くんの腰で詰まった♡  
♡♡♡♡

バスバスバスバスバスバスバスッ！！！！♡♡♡♡♡

バスバスバスバスバスバスバスッ！！！！♡♡♡♡♡

「ッッお♡♡♡ お♡♡♡お♡♡♡お♡♡♡っ♡♡♡ッ  
♡♡♡」

「あ————、出る出る♡♡♡♡ エロまんこに搾り  
取られる♡♡♡♡」

バスバスバスバスバスバスバスッ！！！！♡♡♡♡♡

バスバスバスバスバスバスバスッ！！！！♡♡♡♡♡

乳首もクリトリスもおまんこの奥も、一番気持ちいい瞬間♡♡♡♡

バスンッ！！！！♡♡♡♡♡♡

「……〜〜〜〜〜〜ッッッ！！！！♡♡♡♡♡♡」

「……おお♡♡ まんこもイってんじゃん♡♡♡ きもちー♡♡♡♡」

口の端からよだれを垂らしながら、私は絶頂に体をピクつかせた♡♡♡♡

おちんぽでイカされる感覚はまた別格だった♡♡  
体が満たされて、幸せで♡♡♡♡

次が欲しいと思ってしまう♡♡♡♡

「そろそろ俺もお姉さんのエロ乳首可愛がってやる♡♡」

ベッドから下りた真也くんが下に潜り込んだ♡

「オレも♡♡ いーっぱい擦っちゃったから慰めてあげ

なくちゃ♡♡♡」

光太郎くんも続いた♡♡

二人は下向きに勃起した乳首を、  
れる♡♡

べろべろ♡♡ れろん♡れろん♡

れるれるれるれる…っ♡♡♡

舐め回す♡♡

「っ♡♡♡ ふう…っ♡ んッ♡♡♡」

光太郎くんの言う通り、さっきまで痺れるように刺激  
されていた乳首は、柔らかい舌に当てられて♡♡

今度はくすぐったい感触に喜んだ♡♡

「……じゃあ今度は俺が挿れちゃいますね♡♡♡」

ベッドへ乗ってきたのは祐介くん♡

祐介くんは私を膝立ちにさせ、お尻だけを上げさせると、斜め下からおちんぽを挿入してきた♡ 一気に奥まで♡♡♡♡

「……お、おお…ッ♡♡♡♡」

「おまんこあったかい♡♡♡♡ 奥から締め付けてくれてるし♡♡ これだけでイけちゃいそ♡♡♡♡」

真也くんのおちんぽが抜け、閉じかけていたそこをまたおちんぽで開かれて♡♡

じんじん♡♡ また気持ちいい波が広がっていく♡♡  
♡

もう我慢できなかった♡♡♡♡

……へこお♡♡♡

へこっ、へこっ、へこっ♡♡

ベッドの下の二人に乳首を差し出したまま♡♡

高く上げられたお尻だけを上下に動かす♡♡♡

「んッ！♡♡ お♡♡♡ ッお♡♡ ンッッ！♡♡♡」

「……えっる♡♡ 俺から見るとすごい眺めなんですけど♡♡♡ おちんぽでイったばかりなのにもうおちんぽ欲しいんですか？♡♡」

へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこ…っ♡♡

……ばちっ♡♡ ばちっ♡♡ ばちっ♡♡

腰の動きは速くなり、祐介くんの太ももにお尻がぶつかる♡

それを気にすることもできず、私はただただ自分が気

持ちよくなるために腰を振り続けた♡♡♡

「おッ♡♡ 奥♡きもちいいのっ♡♡ ここ好き！♡♡

ここにおちんぽぶつかるの好き…！！♡♡♡♡」

「そうですね、お姉さんの気持ちいいところバレちゃいますね♡♡♡♡」

「とまんない…！♡♡♡ お、おッ♡♡♡ あ——～  
～っっっ！！♡♡♡♡♡」

■製品版にて♡